

池上義信先生の思い出

種村清作

「君、此処に名前と住所を書きなさい。」

私が池上先生と初めて会ったのは上越生態研（現在の新潟県生態研究会）の研修会に参加したときのことである。当時、私は栃尾市の教育センターにおいて栃尾市の調査を始めたばかりであった。正確な研修場所は覚えていないが、確か糸魚川方面であった。このときホウオウゴケ（Fissidens）を材料にコケ植物という世界のあることを教えていただいて好奇心を抱いたことを記憶している。そして、一日の研修を終えて帰るとき、先生は持っていた手帳を私に渡して「君、此処に名前と住所を書きなさい。」と言われた。私はその時の「何故？」と言う表情に答えるように、続けて「今日、説明したことでもし違っていることがあったら連絡しなければならぬ。」といった趣旨のことを言われたことを記憶している。私はその時、先生の研究者としての厳しさを見た思いがした。

それから、栃尾市内のコケを採集しては池上先生のところに持っていき種の同定をお願いすることが度重なるようになった。おそらく迷惑だったろうに、そのような素振りも見せず丁寧に対応して下さった先生にあらためて感謝の思いでいっぱいである。

「ア、…懐中電灯の裏蓋が…」

同じく栃尾市でのこと。「栃尾の植物」の編集のための調査が佳境に入り、池上先生にも栃尾市内を見てもらおうと思った。前日、私が居住していた栃尾東小学校の教員住宅に泊まっていたら、その日は笹岡 茂氏と三人で入

塩川から守門岳の大岳をめざした。早朝の出発であったが、大岳に到着したのが確か午後の3時頃になっていた。そして、帰り道、辺りが黄昏で歩行に困難をきたしてきたが、不覚にも私も笹岡氏も照明の準備はしていなかった。池上先生が懐中電灯を持っているということで、それを出してもらうこととなった。先生が大きなキスリングの中から取り出したのは、放電しないようにと電池を取りだしてある懐中電灯であった。そして、別の袋の中に入れてあった電池を懐中電灯にセットしようとした時に予期せぬ事が起きた。どうしたはずみか懐中電灯の裏蓋のバネが弾んで草むらの中にその裏蓋がとんでいってしまったのである。さあ、それから三人でその裏蓋を探すが、どうしても見つからない。辺りはすっかり暗くなっていた。しかも夕刻から降り出した雨が止まず、闇が濃く、懐中電灯を諦めて歩きだしたが手探りの状態である。さらに、入塩川からの登山コースは川に沿っており、何度か右岸左岸を行き来しなければならぬ。その時の困難な状況を表現する文才が無いのが口惜しい。そのような困難な状況であっても、キスリング型リュックサックの中といわず外といわず、山と背負った標本を背に黙々と歩いていた先生の姿が脳裏に残っている。結局、濡れ鼠の状態で車を置いたところにたどり着いたのは夜の9時過ぎであった。その夜は泊まってくれるようお願いしたが、先生は固辞されて終電車でお帰りになった。植物に対する執念とも言えるあの情熱を私も持ち続けたい。

池上先生の思い出

戸田明

池上先生、…近寄り難い存在でした。初めてお目にかかったのは、たぶん1982年春の旧与板町調査会だと思います。それとも新潟大学の野外調査のどこかかなあ？いつも同行していた鷲尾さんなどとは違い、調査会でも離れて行動することが多く、あまり話した記憶もありません。

一番の記憶に残っているのは、先生の御神楽岳での武勇伝？でしょうか。雨降りの沢を下る途中、危険を感じて斜

面を駆け登った途端に山津波が押し寄せ、逃げ延びたけれど戻れなくなり、そのまま一夜を明かされた話を、何度か聞いたと思います。先生は雨が降ろうが暗くなるのが、いつまでも採集を続ける方でした。「見えない闇で何を採るのだろう？」と思ったものです。

標本が片づかないので思いを残されてるかもしれませんが、ご冥福をお祈りいたします。